

## ハイ デイ

(第十八回)

津 田 芳 雄 譯

「ほら、フランクフルトからのおみやげですよ」  
お医者様は立ち上つて荷物のそばへ行き、解き  
にかかつた。ハイデイは何が出て来るか、わく  
くしながら見つめてゐた。外の厚い包みをほぐ  
してしまふ、お医者様は云つた。

「さあ、これから先きは、自分で開けてごらん」  
ハイデイは一つ一つお土産をあけて見た。その  
間ぢう、あんまりうれしいの、びつくりしたの  
で、口も利けなかつた。お医者様が又そばへ來  
て、大きな箱を開けて、おばあさんがコーヒーマ  
ーと一緒に食べるお菓子を出して見せてくれた時、や  
つはじめて、うれしそうに叫び聲をあげた。

「まあ、おばあさんも御馳走がいただけるわ」  
そして早速おばあさんへのお土産を包み、今か  
ら持つて行つてあげるのだと云ひ出した。けれど

もおぢいさんは、夕方お医者様を送つて行く時に  
連れて行つてあげるから、その時にしなさいと云  
つた。ハイデイは今度はタバコの箱を見付け出し、  
大よろこびでおぢいさんの所へ走つて行つてわた  
した。おぢいさんはうれしそうに早速パイプにつ  
めて、お医者様と二人でゆつくりとくゆらしなが  
ら、よもやまの話をした。ハイデイはなほも次ぎ  
次ぎにお土産を開けて見てゐたが、突然二人のま  
ところに飛んで来る、お医者様の前に立ち止まつ  
て、話のまぎれるのを待つて云つた。

「先生、さのおみやげよりも、やつぱり先生が  
いらしつて下さつたのが、一等すき」

大人たちは思はず噴き出し、お医者様は、思ひ  
もかけぬ光榮だと云つた。

日が山の向ふに傾きかける、お医者様はそろ

ノ、麓のデルフリヘカヘリ、宿を見付けようミ、腰を上げた。おぢいさんがお菓子ミ肩掛けミ大きな腸詰めを持ち、お医者様がハイディの手をひいて、三人で山を降りた。ペーテルの家まで来るミ、ハイディは別れを告げた。おぢいさんがデルフリまでお客さまを送つてから、迎へに来てくれるまで、おばあさんのミこころで待つてゐるのである。お医者様ミお別れの握手をする時、ハイディはこれが何よりのおもてなしだと思つて、

「あした、山羊ミ一緒にお山へいらつしやいませんミこ？」

ミ訊いた。お医者様はよろこんで賛成した。

ハイディはおばあさんのミこころへ駆け込んだ。

一等はじめに大きなお菓子の箱をやつミのミこで持ち込み、それから腸詰め、一等おしまひに肩掛けミ、三度もかかつて運び込んだ。おぢいさんはみんな入口のミこころにおいて行つたのである。それからハイディは、おばあさんが觸つて見られるやうに、それを出来るだけおばあさんの近くに並べた。肩掛けは膝の上にかけてあげた。

「これね、みんなフランクフルトのクララミおばあさまが、送つて下さつたのよ」

ハイディはびつくりしてゐるおばあさんミブリギッタに説明した。ブリギッタはさつきからハイディが重い荷物を持ち込むのを見て、さういふミこになるのか見當もつかずにぼんやりしてゐた。「おばあさん、お菓子は氣に入つて？、そんなに柔いか、食べてごらんさいよ」

ハイディは何度もさう云つてすゝめたが、おばあさんは、

「さうミこも、さうミこも、ハイディちゃん、さうしようにねえ」

ミ繰り返しながらも、又しても膝の上の温いふかふかした肩掛けを撫でて見ては云ふのだつた。

「寒い冬には、これはほんたうに結構だねえ。こんな立派なものが掛けられるなんて、思ひもよくなかつたがねえ」

ハイディはおばあさんが、お菓子よりも肩掛けの方を喜んでゐるらしいのが、不思議でたまらなかつた。ブリギッタはさつきから、驚きやうれしさを通り越した、殆んミ畏れに近い顔付きで腸詰めを見つめてゐた。今まで一度だつて、こんな大きな腸詰めは見たくミこもなく、まして自分のものミこして持つたミこなきないので、自分の眼が信じ

られないくらゐだつた。不審げに頭を振りながら、  
「アルムをぢさんに、何にするものだか、訊いて  
見なくちやならない」

「云つた。ハイディは即座に答へた。」

「食べるもののよ。そのほかに使ひ方なんかないのよ」

ペーテルがこの時飛び込んで来て、

「アルムをぢさんが、今——」

「云ひかけたが、腸詰めが眼に入るゝ、びつくりしてものが云へなくなり、途切らせてしまつた。けれどもハイディには、おぢいさんがもうぢき迎ひに来てくれるのだと解つたので、おばあさんにさよならを云つた。この頃では、おぢいさんは決しておばあさんの家を素通りしないで、きつゝ挨拶をしに立ち寄つて、おばあさんを元氣付けて喜ばせてやるのだつたが、今日はもう遅いので、ハイディはあしたの朝も亦、雲雀と一緒に起きるのだから、戸口から聲をかけただけで子供を連れて、星空の下を安らかな住み家へ登つて行つた。」

十七、御恩がへし

あくる朝、お医者様はペーテルと山羊に案内されて、デルフリ村からのぼつて来た。お医者様

は時々ペーテルにやさしく話しかけて見るのだったが、さうもこの子から一言でも返事を引き出すことは、むづかしかつた。仕方なく黙り込んだまゝ小屋までのぼつて来るゝ、ハイディが二匹の山羊をつれて、山の朝日をいつばいに受けて、活ききお迎へに待つてゐた。

「今日は行く？」

ペーテルはいつもの通りに訊ねた。都合を訊くききも、誘ふききも、このひき言である。

「もちろんよ——先生もいちつしやるなら」

ペーテルはちらちらお医者様を横眼で見た。おぢいさんはお辨當袋を持つて出て来て、お医者様と挨拶をしてから、それをペーテルの頸にかけてやつた。お辨當はいつもよりすつゝ重かつた。お医者様が子供達と一緒に山でお辨當を食べればおいしからうと思ひ、おぢいさんは肉を餘計に入れておいたからである。ペーテルはきつゝ何か特別の御馳走が這入つてゐるのだらうと思つて、にやにや笑つた。

一行はのぼりはじめた。山羊たちはいつものやうに、われ勝ちにハイディの一等近くに来ようとして、ハイディのまはりに押し寄せて来るので、

しまひにハイディは立ち止まつて云つた。

「みんな先きへ行つて頂戴。うしろを向いたり、わたしに寄つて來たりしないで、お行儀よくするのよ。わたし、先生とお話し、たいんだから」

それから「ゆき」の背中を軽く叩いて、おさなくするのよ、と諭した。やつこのこで山羊の間をすり抜けて、ハイディはお醫者様のそばへ行くミ、お醫者様はその手をひいてやつた。今度の連れのハイディは、ペーテルのやうなむつゝり屋ではなくて、次ぎから次ぎへミ、それぞれの山羊のくせだの、お花だの、岩だの、鳥だの、こゝを、絶え間なく話しかけたので、知らぬ間にいつもの休み場所まで來てしまつてゐた。ペーテルは、お友達を取られた腹癒せに、道々お醫者様をにくらしさうに時々睨み付けてゐたが、幸ひお醫者様は氣が付かなかつた。

ハイディは自分がいつも坐つて景色をながめる大好きな場所へお醫者様を連れて行き、あたゝかい草の上に竝んで坐つた。峯にも谷にも秋の陽は金いろにかゞやき、大雪原は陽の光りにまばゆく照り映え、くすんだ色の岩鼻が太古さながらの厳かさで、くつきり青空にそびえてゐた。朝風が

そよそよ峯を渡つて來て、夏の名残りをさめる風鈴草の花を氣持よさうにそよがせた。頭の上では、あの大きな鳥が、のうのうミ羽をのばして青空に大きな輪を描きながら飛んでゐたが、今日はあのしがれ聲は立てなかつた。ハイディは首をまはしてその一つ一つを見成つた。ゆれる花、青い空、輝く陽、樂しげな鳥——なにもかも、ほんたうに美しかつた！ハイディの眼はよろこびに輝いた。そして、お醫者様もこの美しい景色を見てよろこんでいらつしやるかしらミ、振り向いて見るミ、お醫者様は深くもの思ひに沈んでゐた。ハイディのうれしさうな眼に會ふミ、お醫者様は云つた。

「なるほごよい景色ですね。——だけミハイディちゃん、悲しい心を持つて來た者は、さうすればそれがなほつて、心からこの美しい景色をたのしめるやうになるんだらうね」

「まあ、だつて、こゝちや悲しい心の人なんかありませんわ。悲しい人はフランクフルトにだけゐるのですわ」

ハイディは叫んだ。お醫者様はほゝゐんだが、又まじめな顔になつて云つた。

「だけさね、もしフランクフルトへ悲しみをすっかりおいて来るこの出来なかつた人があるとしたら、ハイディちゃんはその人にさうしてあげる？」

「さうして、かわからなくなつたら、神様にすつかりお話し申し上げればいゝんだわ」

ハイディはきつぱりさう答へた。

「さう、それはいゝ考へだ。だけさその神様から悲しみを遣はされたのだつたら、神様に何さ云つて行けばいゝかしら？」

ハイディはしばらく考へてゐた。心の中で、神様はきつさんな悲しみだつて救つて下さると思ひながら、自分の経験を思ひ出して、やつさ答へを見付けた。

「ちつと待つてゐるのよ。そして、神様はきつさ悲しみから救ひ出して仕合せにして下さるのだから辛棒よく待つてゐて決して逃げ出したりしてはいけないのだつて、しよつちう自分に云つて聞かせるのよ。さうしてゐるさ、きつさ何かいゝことを起つて、神様がいつもわたしたちのことを考へてゐて下さるこゝがわかるのですわ。わたしたちは、先きのこゝが見えないで今の悲しみしかわからな

いから、いつもさうだと思ひ込んでしまふのですけれど」

「美しい信仰だ、いつまでもその信仰をしつかり持ちつゞけて下さい」

「お醫者様はさう云つて、翳つて來た山や、日に照らされた谷を黙つて見わたしてゐるが、やがて又云つた。

「だが、こんな美しい景色を見ても、悲しみに眼がかすんで、ちつとも心がたのしまず、それを思ふに餘計又悲しくなるさ、いふやうな人間があるなんて、ハイディちゃんにはわからないだらうね、わかつてくれるかしら？」

ハイディの幸福に満ちた小さな心は、急に彈丸で射抜かれたやうな痛みを感じた。眼がかすむに聞いて、ハイディはお目様もこの美しい景色も二度も見られないペーテルのおばあさんのことを思ひ出したのである。おばあさんの眼の見えないこゝさは、ハイディの悲しみの種で、いつも心にかゝつてゐるのだつた。ハイディは眞剣な聲で云つた。

「えゝ、わかりますわ。そんな時は、おばあさんの讃美歌をうたへばいゝのよ。さうするさ、少しばかり氣がせいせいして來て、時にはすつかり氣

が晴れて、うれしくなつてしまふこともあるので  
すつて、おばあさんがさう云つてましたわ」

「ごんな讚美歌だらう、わたしにもぜひ聞かせて  
下さい」

「わたし、お日様と神様のお庭のや、そのほかお  
ばあさんの好きなのを、二つか三つしか知りませ  
んのよ。おばあさんはいつでもそれをわたしに、  
もう一度、もう一度つて、二三べんも云はせるん  
ですよ。おばあさんがそれを聞いてゐるミ、のぞ  
みミ勇氣が湧いて来るつていふのを、歌つてみま  
せうか」

お醫者様はうなづき、ハイディは歌ひ出した。

なやみおそろゝこみなかれ

賢きまもりこゝにあり

神こそ安き汝が柱

人敗るこも神は勝つ

見よ敵兵の逃げ散るを

神の御手もて汝がなやみ

みな歡びにかはれるを

よしや時の間神の愛

消え去りゆきてよるべなき

子等は迷ふミ見ゆるこも

疑ふなかれ 偉いなる

神の慈悲は不變なり

こゝろ靜かに待つものに

神はのぞみを諸きたまふ

ハイディは急に止めてしまつた。お醫者様が手  
を眼の前に組み合はせ、ぢつと坐つたまゝ動かな  
いので、きつと眠つてしまつたのだと思つたから  
である。こんき眼が覺めた時、聞きたい云へば  
又つゞきを歌つてあげようと思つた。あたりは何  
のもの音もしなかつた。お醫者様は黙つて坐りつ  
ゞけてゐたが、決して眠つてゐるのではなかつた。  
遠い遠い昔の思ひ出に耽けつてゐたのである。小  
さい子供の時分に、お母さんが肩に手を掛けて、や  
さしくちつと見成りながら、今ハイディの歌つて  
くれたあの讚美歌を、よく聞かせてくれたもので  
ある。思へばあの歌を聞かなくなつてから、何年  
になるだらう。ハイディが歌ひ止めるミ、お母さ  
んのなつかしい聲がつゞき、なほもはるかに思ひ  
出へミ運び去るのだつた。長い夢想から醒めるミ、  
お醫者様は、不思議さうに自分を見つめてゐるハ

イディミ眼が會つた。

「ハイディちゃん、ほんたうにいゝ讚美歌だつたねえ。又こゝへ來て聞かせて下さいね」

ハイディの手をさつてさういふお醫者様の聲には、さつきまでなかつた嬉しさうな響があつた。

ペーテルはさつきから、むしやくしやしてたまらなかつた。ハイディはもう幾日も一緒に山へ來なかつたのに、やつこ來たと思へば、お醫者様さばかり話し込んでゐるので、腹が立つて仕様がないのである。たうこゝう癪癪を起し、お醫者様のうしろに立つて、拳骨をかためて打つまねをした。いつまで経つてもハイディがお醫者様のそばを離れないので、果ては兩手で拳骨をふりかため、益々ひきく打つて見せるのだつた。やがてお日様が頭のま上に來るこ、聲をかぎりに叫び立てた。

「晝めしだよーオ」

ハイディがお辨當をまりに立つて行かうとするこ、お醫者様はおなかとすいてゐないから、お乳だけもらつて、もつこ上の方までのぼつて見たいと云つた。さう云はれて見ればハイディもおなかとすいてゐないので、やつぱりお乳だけにしてお醫者様さ、いつか「ひわ」がもう少しで轉がり落ち

さうになつた昔の生えた大きな岩のまゝころまで案内するこにした。そこで、ペーテルのまゝころに走つて行き、わけを話してお乳を二人分しぼつて來てくれさたのんだ。ペーテルはなかなか呑み込めなかつた。

「そいぢや、あの袋の中のお辨當は、誰が食べるんだい？」

「あんたにあげるわ。だから、早くお乳をしぼつて來てよ」

ペーテルがこの時ほきてきばきさ仕事をやつてのけたのは珍らしいこさだつた。勿論、袋の中のお辨當目當であつた。二人がしづかにお乳をのみ始めるが早いこ、ペーテルは袋を開けた。肉の大切れを見た時は、うれしくつて軀が震へた。けれども取り出さうとした途端、はつきして手を引つ込めた。こんな御馳走をそつくりくれた親切なお醫者様に、自分はさつき拳骨を振りまはしたこさと思ひ出し、氣が鈴めたのである。急に飛び上るこ、さつきの所に駆けて行き、もう決してあんなこさはしないさいふしるしに、兩手をひろげて、氣のすむまで差し上げておいてから、さもおいしさうに、せいせいした氣分で御馳走を食べた。